



Title	ベトナム語の感情語 thương の意味拡張における主体化
Author(s)	Doan, Ngoc Minh Tran
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 107-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベトナム語の感情語 *thương* の意味拡張における主体化

Doan Ngoc Minh Tran

1. はじめに

本稿は、ベトナム語感情語 *thương* の意味拡張を、Langacker (1990) の「主体化」の観点から明らかにすることを目的とする。*thương* は、漢字「傷」に由来し、身体的な「傷」や「痛み」と関わる語である。一方で、現代ベトナム語では、悲惨な事態に対する評価、他者への共感、さらには愛情を表す語としても用いられる (Doan 2026)。たとえば、*thương* は以下のような用法をもつ。

(I) 対象に属する身体的・心理的な痛み

- (1) Cô ấy có một vết¹ thương ở tay. (作例)
彼女 ある 一 類別詞 傷 に 手
「彼女は手に傷がある。」

- (2) Cô ấy có một vết thương lòng. (作例)
彼女 ある 一 類別詞 傷 心
「彼女は心に傷を負っている。」

(II) 悲惨な事態に対する観察者の評価

- (3) Hậu quả của chiến tranh thật thương tâm (Doan 2026 : 138)
結果 の 戦争 本当に 傷 心
「戦争の結果は本当に痛ましい。」

(III) 相手の痛みに対する話者の共感

- (4) (母は毎日、私を育てるためにとても苦労して働いている。)
Tôi thương mẹ lắm. (作例)
私 傷 母 とても
「(母のことを思うと)、心が痛む。」

(IV) 相手の痛みに対する話者の共感

- (5) (子どもがもうすぐ一人で留学することになっている。)
Tôi thương con lắm. (作例)
私 傷 こども とても
「(これから一人で苦労するかもしれないと思うと)、守ってあげたい気持ちになる。」

(1)(2) では、*thương* は *vết thương* 「傷」の形で用いられている。ここでの *vết* は傷や跡を数える類別詞であり、*thương* は「傷」を表す名詞である。(1) は身体的な傷、(2) は *lòng* 「心」と結びついた心理的な傷を表している。これに対して、(3) の *thương tâm* は「痛ましい」という評価を表す表現であり、悲惨な事態に対する観察者の見方が関わっている。さらに、(4)(5) では、*thương* は動詞として用いられ、相手の苦労や将来の困難を思うことによって生じる話者の感情を表している。

これらの例から分かるように、*thương* は「身体的な傷」「心理的な傷」を表すだけでなく、「痛ましい」という評価、相手への共感、子どもに対する愛情や保護したい気持ちを表す場合もある。ここで問題となるのは、これらの意味がどのようにつながっているのかという点である。すなわち、なぜ「傷」や「痛み」を表す語が、悲惨さの評価、相手への共感、さらには愛情といった感情表現へと拡張するのだろうか。

¹ 現代ベトナム語で類別詞として扱われる。ある表面に残った (乾いた状態の) 跡を特定する (Ngo 2014 : 204)

Doan (2026) では、感情表現としての *thương* について、話者が相手の困難や苦しみを認識し、それを自分に関わるものとして受け止める点に特徴があると論じられている (p.147-149)。一方で、感情表現としての *thương* と、「傷」や「痛み」を表す用法、また「痛ましい」という評価的用法との連続性については、さらに詳しく見る必要がある。

本稿では、この問いに対して、Langacker (1990) の主体化の観点から、*thương* における「痛み」の焦点がどのように変化していくのかを考察する。具体的には、*thương* の意味を、①対象に属する身体的・心理的な痛み、②悲惨な事態に対する観察者の評価、③相手の痛みに対する話者の共感、④未来の痛みを予測することによって生じる愛情、という四つの段階に整理する。そのうえで、*thương* の意味拡張を、「痛み」の焦点が対象の側から観察者・話者の認知・評価の側へと移行していく主体化の過程として捉える。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、先行研究として Doan (2026) を取り上げ、*thương* の語源と意味の広がりを確認する。第3節では、Langacker (1990) の主体化の概念を導入し、本稿の分析枠組みを示す。第4節では、*thương* の意味拡張を四つの段階に分け、具体例に基づいて分析する。最後に第5節では、本稿の考察をまとめる。

2. *thương* の語源と意味の広がり (Doan 2026)

本節では、Doan (2026) に基づき、ベトナム語 *thương* の語源と意味の広がりを確認する。まず 2.1 節では、漢字表記を付したベトナム語辞典における *thương* の多義性を整理する。次に 2.2 節では、漢越辞典の記述を参照し、漢文・中国語由来の意味を確認する。最後に 2.3 節では、現代ベトナム語辞典における見出し語の扱いを確認し、感情表現としての *thương* がどのように記述されているかを見る。

Doan (2026) では、ベトナム語 *thương* の語源と意味の広がりについて辞書記述に基づく考察が行われている。そこで *thương* はもともと漢字「傷」に由来し、「身体的損傷」を表す語であったが、そこから「心理的な痛み」を指す用法へと広がり、さらに現代ベトナム語では「他者への共感」などの感情を表す用法へと発展していると論じられている。

2.1 漢字表記を付したベトナム語辞典における記述

Doan (2026 : 138-140) はまず、漢字が付記されているベトナム語辞典を参照し、*thương* が漢字「傷」に由来する語であることを確認している。たとえば、『大南國音字彙』(Đại Nam Quốc Âm Tự Vị, 1895: 429) や『越南字典』(Việt Nam Tự Điển, 1931: 587) では、*thương* の多義性が以下のように示されている。

(I) 身体的な傷 (例えば、vết thương 「疳傷」 (傷))

(6) Tôi có một vết thương ở tay.

私 ある 一 類別詞 傷 に 手
「私は手に傷がある。」

(II) 心理的な傷 (例えば、thương tổn tinh thần 「傷損精神」 (心理的に傷つく))

(7) Cô ấy bị thương tổn tinh thần.

彼女 受身 傷損 精神
「彼女は心理的に傷ついた。」

(III) 悲惨さに対する観察者の評価 (例えば、thương tâm 「傷心」 bi thương 「悲傷」)

(8) Hậu quả của chiến tranh thật thương tâm.

結果 の 戦争 本当に 傷 心
「戦争の結果は本当に痛ましい。」

(IV) 他人への感情 (例えば、thương kẻ nghèo 「傷+貧しい人」 (貧しい人に共感する))

(9) a. Tôi thương kẻ nghèo khó. (作例)

私 傷 人 貧しい 困難な

b. Tôi cảm thấy thương kẻ nghèo khó. (作例)
私 感じる-見える 傷 人 貧しい 困難な
「私は貧しい人をおかしい思う。」

(Doan 2026 : 138-139)

まず、(6)の vết thương において thương は「身体的な損傷」、すなわち手の傷のような具体的な外傷を表している。この用法では、thương は名詞として機能し、多くの場合、vết のような類別詞を伴って用いられる。これに対して、例(7)の thương tổn tinh thần では、身体的な傷という意味が心理的領域へと拡張されている。ここでの thương は、外部からの出来事や言動によって内面が傷つけられることを表し、「心理的に傷つく」という状態を示している。また、例(8)の thương tâm では、thương は個人の心理的反応そのものを述べるのではなく、戦争の結果のような出来事や状況を「痛ましいもの」として評価している。したがって、この用法では、話者の内面感情よりも、出来事の悲惨さという性質が前景化されている。最後に、例(9)では、thương は他者への共感や心配を表す動詞として用いられている。この場合、話者は相手の困難や不幸を認識し、それを自分に関わるものとして受け止めている。thương は単独で用いられることもあるが、cảm-thấy「感じる」のような感覚動詞とともに現れることも多い (pp.138-139)。

ただし、これらの辞典では、以上の意味が一つの項目の中に並列的に示されているものの、それぞれの意味が歴史的順序や使用頻度に基づいて分類されているわけではない。そのため、どの意味が漢文・中国語からの借用に由来し、どの意味がベトナム語内部で発展したものなのかを明らかにするには、漢越語を専門的に収録した辞典を参照する必要がある (Doan 2026: pp.139-140)。

2.2 漢越辞典における記述

さらに、『漢越辞典』(Hán Việt Từ Điển, 1942: 40)や『漢越辞典簡要』(Hán Việt Từ Điển Giản Yếu, 1931: 840-842)も参照されている。これらの辞典では、「傷」(thương)の項目において、主に以下の意味が確認される (p.140)。

(10) 身体的な傷：thương tích (傷跡)、thương hàn (傷寒) など

(11) 心理的痛み：thương cảm (傷感) など

(12) 悲惨さに対する観察者の評価：傷心 (thương tâm)、惨傷 (thảm thương) などといった意味が主に取り上げられている。

一方で、これらの辞典には、2.1 節の用法(IV)で見たような、thương を単独で用いて他者への共感や心配を表す現代ベトナム語的な用法はほとんど確認されない。このことから、thương は漢文から取り入れられた当初、主に身体的損傷、個人的な心理的痛み、または悲惨な状況に関する意味を担っていたと考えられる。そして、現代ベトナム語で広く用いられる「他者への共感」としての thương は、ベトナム語に借用された後で新たに定着した用法であるとされる (p.140)。

2.3 現代語辞典における意味の扱い

このような語義の変遷を踏まえ、現代ベトナム語辞典 Từ Điển Tiếng Việt『ベトナム語辞典』(2021)における thương の扱いも確認されている。同辞典は、1945 年以降の文学作品や出版物を主なデータとして編纂されたものであり、ローマ字表記のみで、漢字は付記されていない。また、見出し語は単語または語句として成立している表現ごとに独立して提示されている。そのため、従来一つの項目に含まれていた意味も、以下のように別々の見出しとして整理されている。

(13) bị thương (見出し語 bị) (動詞) (p.76) : 身体的な傷を負う

(14) vết thương (見出し語 vết) (名詞) (p.1235) : 具体的な傷跡や外傷

(15) thương tâm (見出し語 thương tâm) (形容詞) (p.1236) : 痛ましい

(16) thương (見出し語 thương) (動詞) (p.1410) : 愛情や共感といった感情表現

2.1 節で確認した辞典では、*thương* の多義性が一つの項目にまとめられ、「身体的な傷」「心理的な傷」「痛ましい状況」「他者への感情」といった用法が並列的に提示されていた。これに対し、現代語辞典では、それぞれの用法が別々の見出しとして整理されている。

たとえば、*bị thương*、*vết thương*、*thương tâm* は、*thương* を要素とする複合語として扱われ、「身体的損傷」や「痛ましい状況」に特化した表現として記述されている。他方、感情表現としての *thương* は、単独の動詞として用いられ、「他者への共感」を表す独立した見出し語となっている。このような項目立ての違いから、母語話者にとって感情表現としての *thương* は独立した意味として認識され、「傷」という基本義との直接的なつながりは必ずしも意識されない可能性がある (p.141)。

以上のように、Doan (2026) は、*thương* が「身体的な傷」から「心理的な痛み」「痛ましい状況」、さらに「他者への共感」を表す語へと広がってきたことを整理している。ただし、これらの意味がどのように連続しているのかについては、さらに考察する余地がある。そこで次節では、Langacker (1990) の主体化の概念を導入し、*thương* の意味拡張を分析するための枠組みを示す。

3. 理論的枠組み (Langacker 1990)

本稿では、*thương* の意味拡張を、Langacker (1990) の「主体化」(subjectification) の観点から捉える。本節では、Langacker (1990) の「主体化」の概念を導入する。

Langacker (1990 : 5) では、意味は客観的な事態そのものだけではなく、その事態が概念化者によってどのように捉えられるかにも関わるとされる。このような意味観を前提とすると、意味拡張もまた、単に語が新しい対象を指すようになる現象ではなく、同じ事態や関係が概念化者によってどのように捉え直されるかという問題として考えることができる。そのような意味拡張の一つとして、Langacker (1990) は主体化を挙げている。Langacker は主体化を「重要な意味拡張の一類型」として説明している (p. 5)。

主体化とは、もともと客観的に捉えられていた関係が、話者や概念化者の視点に関わるものとして捉え直される過程である (Langacker 1990, p.16)。Langacker はこの過程を、「ある関係が客観的な軸から主観的な軸へと移ること」と述べている (p. 16)。すなわち、主体化とは、事態そのものに属していた意味が、話者の認知や評価に関わる意味へと移行する過程である。

Langacker (1990) は、法助動詞の発達を主体化の例として取り上げている。法助動詞は、もともと主語の意志・能力・可能性など、比較的客観的に捉えられる意味を表していた。

たとえば、英語の *will* は「望む」、*may* は身体的な能力、*can* は知識や精神的な能力と関わる意味をもっていたとされる (pp. 25–26)。しかし、これらの意味は次第に、主語そのものに属する力ではなく、話者が事態をどのように判断するかに関わるものへと移行していく。Langacker はこの過程を、力の所在が客観的な軸から主観的な軸へ移る主体化の過程として説明している (p. 26)。たとえば、Langacker (1990) は、法助動詞 *must* が表す力を「一種の必要性」として説明している (p. 27)。

(17) She must leave. (Langacker 1990 : 27)

(18) Rules must always be obeyed. (Langacker 2008 : 305)

(17) および (18) のような用法では、*must* は、ある行為が必要であることを表す。(17) では「彼女が去ること」が必要な過程として、動詞 *leave* によって具体化されている (Langacker 1990: 27)。また (18) では、規則を守ることが強く求められている。Langacker (2008) は、義務を行為の実行へと向かわせる社会的な力として捉え、*must* は強い義務を表すと述べている (p. 305)。したがって、これらの用法における *must* は、行為の実現に向けられた必要性や義務を表していると考えられる。

(19) You must be tired. (Langacker 1990 : 28)

(20) They must be completely satisfied. (Langacker 2008 : 307)

これに対して、(19) および (20) のような認識的用法では、must は客観的な義務を表すのではない。(19) の must be tired は、「あなたが疲れていなければならない」という意味ではなく、相手の様子や状況から、話者が「あなたはきっと疲れている」と推論していることを表す (Langacker 1990: 29)。同様に、(20) も認識的に解釈される場合、「彼らが完全に満足しなければならない」という義務ではなく、話者が現在の状況から「彼らは完全に満足しているはずだ」と判断していることを表す (Langacker 2008: 307)。

このように、must の意味は、客観的な必要性から、話者の推論や判断に関わる必要性へと移行している。この変化は、意味の焦点が客観的な事態の側から話者の認知・評価の側へ移る主体化の例として捉えることができる。

本稿では、この主体化の考え方を踏まえ、thương の意味拡張を考察する。次節では、thương における「痛み」が、対象に属するものとしての意味から、観察者・話者の認知や評価に関わる意味へと広がっていく過程を、具体例に基づいて確認する。

4. thương の意味拡張における主体化

本節では、thương の意味拡張を、主体化の程度に応じて四つの段階に整理し、考察する。

具体的には、第一段階では、thương は身体的・心理的な傷を表し、「痛み」はそれを経験する対象の側に位置づけられる。第二段階では、thương tâm のように、悲惨な事態に対する観察者の評価が加わる。第三段階では、相手の痛みを話者が認識し、共感的に受け止める感情として thương が用いられる。第四段階では、相手が現在痛みを経験していなくても、話者が将来の困難や苦労を予測することで、愛情や保護したい気持ちとしての thương が生じる。これらの段階は、互いに完全に切り離された意味ではなく、「痛み」の焦点が対象の側から観察者・話者の側へと移行していく連続的な過程として理解できる。

次に、4.1 節から 4.4 節で具体例をもとに、それぞれの段階における thương の意味を見ていく。

4.1 対象に属する痛み：身体的・心理的な傷

第一段階では、thương は身体的な傷や心理的な傷を表す。この段階では、「痛み」はそれを経験する対象に属するものとして捉えられており、話者の評価や感情はまだ前景化していない。したがって、ここでの thương は主体化の程度が最も低い用法であると考えられる。たとえば、(19) と (20) が挙げられる。

(19) Cô ấy có một vết thương ở tay. (作例)
彼女 ある 一 類別詞 傷 に 手
「彼女は手に傷がある。」

(22) Cô ấy có một vết thương lòng. (作例)
彼女 ある 一 類別詞 傷 心
「彼女は心に傷を負っている。」

(19) では、vết thương (類別詞＋「傷」) が身体的な傷を表しており、その傷は「彼女の手」に存在するものとして描かれている。一方、(20) では、vết thương lòng (類別詞＋「傷」＋「心」) が心理的な傷を表している。ここでは「痛み」は身体的なものではないが、それでもなお、痛みを経験する主体である「彼女」に属するものとして捉えられている。したがって、(19)(20) のいずれにおいても、thương は対象に属する痛みを表している。

4.2 観察者によって評価される痛み：悲惨さの評価

第二段階では、thương は、対象に属する「傷」そのものを指す名詞的な用法から、悲惨な事態を「痛ましい」と評価する形容詞的な用法へと広がる。この段階では、焦点は依然として悲惨な事態そのものに置かれている。その例として、(23)の「痛ましい状態」を表す thương tâm (「傷」＋「心」) が挙げられる。

- (23) Hậu quả của chiến tranh thật thương tâm (=3))
 結果 の 戦争 本当に 傷 心
 「戦争の結果は本当に痛ましい。」

(23)では、thương tâm は、戦争がもたらした結果を「痛ましいもの」として描写している。thương tâm は「傷」＋「心」という構成をもつため、ここでの「痛み」は、単なる事態の性質ではなく、その事態を見た者の内面的反応、すなわち「心」の痛みとも関わるものとして理解できる。したがって、この用法では、焦点はなお悲惨な事態そのものにあるが、そこには観察者・話者の視点や評価がすでに関与していると考えられる。

4.3 相手の痛みに対する共感

第三段階では、thương は、相手の痛みや苦しみをきっかけとして話者の中に生じる共感的感情を表す。この段階で重要なのは、thương が「傷」そのものを表す名詞ではなく、話者の感情を表す動詞として用いられる点である。つまり、「痛み」は依然として相手の経験に属しているが、thương が直接表しているのは、その痛みに対して話者が抱く感情である。したがって、この段階では、相手の痛みを前提としながらも、意味の焦点は話者の共感的感情の側へと移行していると考えられる。

- (24) (昔、母は私を育てるためにとても苦労して働いていた)

Tôi thương mẹ lắm. (作例)
 私 傷 母 とても
 「(母のことを思うと)、心が痛む。」

- (25) (母は毎日、私を育てるためにとても苦労して働いている。)

Tôi thương mẹ lắm. (作例)
 私 傷 母 とても
 「(母のことを思うと)、心が痛む。」

(24) では、母の苦労は過去の経験として示されている。話者は、母がかつて自分を育てるために苦労して働いていたことを想起し、その痛みや苦労に対して thương を用いている。ここでの thương は、母の苦労そのものを表すのではなく、その苦労を思い起こした話者の側に生じる共感的感情を表している。一方、(25) では、母の苦労は現在も続いているものとして示されている。話者は、母が今も毎日苦労して働いていることを認識し、その現在進行中の苦労に対して thương を用いている。この場合も、「痛み」や「苦労」は母に属する経験であるが、thương が直接表しているのは、その経験を見た話者の感情である。

したがって、(24)(25) のいずれにおいても、thương は対象に属する痛みそのものではなく、その痛みを認識した話者の共感的感情を表す動詞として機能している。第二段階では、観察者の評価は悲惨な事態そのものに向けられていたが、第三段階では、具体的な相手に向けられる話者の感情がより明確に前景化している。

4.4 未来の痛みの予測と愛情

第四段階では、相手が現在実際に痛みを経験していなくても、話者が相手の将来の困難や苦労を予測することによって、thương が生じる。この段階では、「痛み」は対象に現実存在するものではなく、話者の想像や予測の中で構成される。そのため、thương は共感を超えて、保護したい気持ちや愛情に近い感情を表すようになる。つまり、この用法では、「痛み」の所在が対象の側から話者の認知・想像の側へと大きく移行しており、主体化の程度が最も高い段階であると考えられる。たとえば、(26)(27) では、相手に現在明確な痛みや苦労があるわけではない。それでも、話者は相手の将来の困難や弱さを想像し、その想像に基づいて thương を用いている。

- (26) (子どもがもうすぐ一人で留学することになっている。)

Tôi thương con lắm. (作例)

私 傷 こども とても

「これから一人で苦労するかもしれないと思うと、守ってあげたい気持ちになる。」

- (27) (子どもが目の前で無邪気に遊んでいる。)

Tôi thương con lắm. (作例)

私 傷 こども とても

「子どもが遊んでいる姿を見ると、愛おしくてたまらない。」

(26) では、子どもは現在実際に痛みや苦労を経験しているわけではない。しかし、話者である親は、子どもがこれから一人で生活し、困難に直面する可能性を予測している。そのため、ここでの *thương* は、現在の痛みに対する共感ではなく、未来の痛みを想像することによって生じる愛情や保護したい気持ちを表している。

一方、(27) では、子どもは目の前で無邪気に遊んでおり、痛みや苦労は明示されていない。それでも話者は、その幼さや無防備さを見て、将来この子が経験するかもしれない困難を暗に想像し、愛おしさや守りたい気持ちを抱いている。この場合、*thương* は、具体的な痛みへの共感というよりも、話者の想像や予測に基づく愛情として理解できる。

したがって、第四段階では、「痛み」は相手に現実には生じているものではなく、話者の想像や予測の中で構成される。この点で、*thương* は、相手の現在の痛みに対する共感から、未来の痛みを見越した愛情や保護の感情へと拡張していると考えられる。

以上の分析を主体化の観点から捉えると、*thương* の意味拡張は、「痛み」の焦点が対象の側から観察者・話者の側へと少しずつ移行していく過程として理解できる。第一段階では、「痛み」は対象に属する身体的・心理的な傷として現れる。第二段階では、悲惨な事態に対する観察者の評価が加わり、第三段階では、相手の痛みに対する話者の共感的感情が前景化する。さらに第四段階では、話者が相手の将来の困難や苦労を想像することによって、*thương* は愛情や保護したい気持ちを表すようになる。

このように見ると、*thương* の意味は、対象に属する痛みから、観察者・話者の認知・評価・想像に関わる感情へと段階的に広がっていると考えられる。したがって、*thương* の意味拡張には、主体化の過程が関わっていると捉えることができる。

5. まとめ

本稿では、ベトナム語感情語 *thương* の意味拡張を、Langacker (1990) の主体化の観点から考察した。分析の結果、*thương* の意味は、身体的・心理的な傷のように対象に属する痛みから、悲惨な事態に対する観察者の評価、相手の痛みに対する話者の共感、さらに未来の痛みを予測することによって生じる愛情へと段階的に拡張していることが明らかになった。

この過程では、「痛み」の焦点が対象の側から観察者・話者の認知・評価の側へと移行している。したがって、*thương* の意味拡張は、単なる語義の増加ではなく、他者の痛みを話者がどのように捉え、共感し、評価するかに関わる主体化の過程として理解できる。

参考文献

- Đào Duy Anh (2005). *Hán Việt Từ Điển Giản Yếu* (『漢越辞典簡要』) [原著 1931 年刊]. 文化情報出版社.
- Doan Ngoc Minh Tran (2026) 『感情語の意味解釈における文化的背景と 身体性の相互作用 ―ベトナム語の *giận* と *thương* の分析を例に―』 博士論文, 大阪大学.
- Hội Khai Trí Tiến Đức (1954). *Việt Nam Tự Điển* (『越南辞典』). ヴァンムオイ出版社.
- Huỳnh-Tịnh Paulus Của (1895). *Đại Nam Quốc Âm Tự Vị* (『大南國音字彙』). Imprimerie Rey, Curiol & Cie.
- Langacker, R. M. (1990). Subjectification. *Cognitive Linguistics*, 1, 5-38.

- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Ngo Quang Vinh (2014). 『現代ベトナム語の類別詞研究—類別詞の本質とその意味・用法—』. 一橋大学博士論文.
- Thiều Chửu (1942). *Hán Việt Từ Điển* (『漢越辞典』). ホーチミン市出版社.
- Viện Ngôn Ngữ Học (言語学研究所) (主編: Hoàng Phê). (2021). *Từ Điển Tiếng Việt* (『ベトナム語辞典』) [初版 1988 年]. ホンドウック出版社.